

## モオラナ・バシャニのラブピヤート

## ——バングラデシュ政治研究2——

萱野智篤

## 目次

## はじめに一政治と宗教

## I. ラブピヤートの思想

- ・保全者としての神
- ・多様性の承認
- ・神への愛と人への愛
- ・愛情に基づく秩序
- ・利己心と精神性
- ・多様性と精神性

## II. ジハードの意義

- ・窮乏化の畏
- ・イスラーム世界に向かって、  
世界の指導者に向かって

## むすびにかえて—ラブピヤートと政治

## はじめに一政治と宗教

宗教とは行なふニアリ。  
行なわざるは宗教ニあらず。<sup>(1)</sup>

本来を誤りて憚らざるは、政治関係の通弊たる当世の大悪事たり。国家社会人類の生命を永續せんとせば、断じてこの大誤を根底より改め、天然の良能を発揮せしむるの外なし。果して是を実行断決するに於ては、憲法法律教育の渾てを全廃して、更に天神を基とする方法、即ち「広き憲法」を設くべし。誠に天則によらば即ち憲法の天にかなうを言うなり。真理を中心とする憲法なり。<sup>(2)</sup>

田中正造

田中正造(1841-1913)は、近代日本に初めて開かれた議会で、衆議院議員として足尾鉍毒事件を追及して明治政府を批判し、天皇への決死の直訴を行った。その後、彼は獄中でキリスト教に触れ、残りの人生を鉍毒被害民と共に生きる。この決断——亡村の危機にある谷中村にとどまり、そこに生きること——を彼は「天国への道普請」と呼んだ。田中正造は、この天国へ至る道を追求することによって、企業と政府が合体して人民を死に至らしめる政治を改め、「天神を基とする」新たな憲法による政治を実現することを求めた。

冒頭に引いた彼の言葉は、このような戦いの中から掴み取られた宗教観を端的に表している。彼にとっての宗教とは、超越的な存在である天あるいは神の指し示す秩序を、現世において人間が実現するために戦い続けることに他ならなかった。彼はその最後の日まで被害民と共に生きた。フィールドワークの途中で力尽き、村人の家で息を引き取った彼の荷物の中にあった全財産は、日記と被害民の実情を伝える草稿、新約全書一卷、帝国憲法とマタイ伝をつづり合わせた小冊子、鼻紙少々<sup>(4)</sup>と石ころ数個であった。

モオラナ・バシャニ(モオラナ・アブドゥル・ハミド・カーン・バシャニ<sup>(5)</sup>1885-1976)は、20世紀のインド亜大陸の政治において、きわめてユニークな足跡を残した政治家であり、イスラーム指導者である。そして、その

---

キーワード：バングラデシュ、イスラーム、ラブピヤート

思想と行動において田中正造と響きあう特徴を見出すことが出来る。

小論の目的は、バシャニがその90年を超える生涯の中で、言葉と行動を通じて発したメッセージの中に、田中正造と響きあう政治と宗教の関わりのあるあり方——超越的な存在とその秩序を実現するための人間の戦い——を探り出し、それをバングラデシュ政治の文脈の中に位置づけることにある。

近代政治においては、世俗主義が原則とされ、政治は宗教と切り離され、宗教は公的世界に関わらない私的領域に限定された。しかしながら、近現代の世界において、政治と宗教が深い関わりを持った例は枚挙に暇がない。また、その結びつきのあり方は実に多様である。田中正造はその貴重な一例であるが、田中正造の戦いの相手であった明治国家もまた、国家宗教としての神道によって支えられていた。さらに、卑近な例を挙げれば、1995年に東京で地下鉄テロを行ったオウム真理教は、その前の総選挙において政界への進出を図っていた。また、バシャニが生まれたインド亜大陸においては、近年ヒンドゥー・ナショナリズムの勃興と他方イスラーム法による統治を求める原理主義的な動きの両方の活発化が著しい<sup>(6)</sup>。さらに視野を広げてみれば、キリスト教を含め、宗教と政治に関わりを深める傾向は、現在、世界中で見られる現象である。

21世紀の今日、私たちは宗教復興の時代に生きていと言えよう。「神は死んだ」として、理性を備えた人間による秩序の形成を目指した近代という壮大なプロジェクトは、理性を超える存在を希求する人間の日常的抵抗にさらされている。世俗主義を規範として掲げ、これらの動きを批判するだけでは、その背景にある社会的、経済的な要因を理解することは出来ない。また、人間にとっての宗教の意義とその政治との結びつきの多様なあり方を十分に理解するためには、むしろ、これ

らの思想と運動における、政治と宗教の結びつきを、様々な具体的な事例を分析して客観的に捉えなおし、類型化することによって、それぞれの特徴を理解することが必要なのではないだろうか。

神ならぬ身の、限定された認識・判断能力しか持たない人間が、一体どうやってちっぽけな人間理性を超える神の存在を認識できるのかという根本的な疑問は残る。しかしながら、歴史の中で限られた時間を生き、神による秩序を求めた人々が、その生涯においてどのような経験の中から神に向かったのか、神の前における人間存在をどのようなものとして捉え、神と人間関係をどのようなものと理解したのか、そして彼らの言う神による秩序とはどのようなものだったのかを、具体的な人間の思想と行動の分析を通じて明らかにすることは可能である。「神に至る道」は多様なのである。

モオラナ・バシャニの思想と行動をこのような視点から読み解くことは、現代世界における宗教と政治の結びつきを考える上で、貴重な一例を明らかにしてくれる。

## 南アジア史の文脈におけるバシャニ

バシャニが生きた19世紀末から20世紀後半の南アジアは、宗教的アイデンティティーによって政治共同体が分断され、コミユナルな紛争が激化した時代であった。

英植民地統治下で被支配層に一定の自治と政治への参加が認められる中で、少数派として危機感を抱いたムスリム富裕層は、自分たちの利益確保を狙って1906年全インドムスリム連盟を結成した。そして、ムスリム連盟は、イギリスの分割統治政策と共振して浮沈を経つつも次第に勢力を拡大してゆく。1940年のラホール会議におけるジンナーの、インドは歴史と伝統を異にするムスリムとヒンドゥーという2つのコミュニティによって構成されている、という「二民族論」の主張とそれ

に基づく独立諸国家の要求は、一方では世俗の政治家としてのジンナーの冷徹な戦略に基づくものだったが、他方、草の根レベルで地主や高利貸しによる搾取にあえいでいた貧農や手工業者の解放へのユートピア的期待を収斂する効果を持った。1947年のインド・パキスタン分離独立は、このようにイギリスが蒔いた分割統治という種が、ムスリム富裕層の利益確保の要求によって促成され、さらにムスリム下層のユートピア的解放への期待によって爆発的に成長し、最終的にはイギリスを放逐して、インドとパキスタンという2つの異なる政治共同体として実を結んだものと考えることが出来よう。

バシャニは、この時代にアッサム州のムスリム連盟の政治家として、州議会議員を務め、ベンガル地方からの移住ムスリム農民の権利擁護運動に献身する。アッサムというインド北東部の辺境で、彼は当時最も抑圧された立場にあった移住農民の立場に立ち、アッサム州政治の中で、さらに亜大陸の激動の中で、彼らの期待を現実政治のうでで実現することを目指していた。

だが、ムスリム下層農民の解放への希望を力として、1947年に「清浄な国」として生まれたはずのパキスタンに対する期待は、やがて失望に変わる。バシャニはこの時、出身地である東パキスタンに戻り、ムスリム連盟から脱退して、1949年スフラワルディーらと共にパキスタンで最初の野党アワミ・ムスリム連盟（1954年にアワミ連盟に改称）を結成する。野党の指導者として活躍する中でもバシャニは、自らは議員や閣僚の地位に就かず、在野の政治家として活動し、1957年には当時政権与党となっていたアワミ連盟を脱党して全国アワミ党（NAP）を結成しパキスタン支配層に対する仮借の無い批判を展開する。この時代、バシャニは共産党を初めとする左翼勢力の指導者とも目され、「赤いモオラナ（モオラナはイスラームの知識人の呼称）」と

も呼ばれた。

西パキスタンによる東パキスタンに対する政治的・経済的支配への反発は、1965年の6項目要求運動、1970年の国民議会選挙におけるアワミ連盟の圧勝を導き、1971年3月のパキスタン軍による弾圧をきっかけとした凄惨な内戦を経てバングラデシュの独立に至る。既に齢80を超えていたバシャニは、独立戦争時にはインドにおいて軟禁状態に置かれていたが、独立後バングラデシュに帰り再び野党の指導者としての活動を再開し、1976年インドとの公平な水資源の分配を求める大衆運動を指導した後、その生涯の幕を閉じる。<sup>(8)</sup>

90年を越えたその生涯において、多彩な政治的経歴を通じて、それぞれの時代の政治に大きな影響を与えたバシャニだが、その生涯において彼に対する評価には極めて多様なものがあつた。<sup>(9)</sup> また、その死後、バングラデシュにおいては「偉大な国民的指導者の一人、被抑圧者の味方」としての評価にはゆるぎないものがあるものの、その生涯にわたる政治活動の背景にあって原動力となった彼の政治思想・哲学の究明が十分になされているとはいいがたい。<sup>(10)</sup>

バシャニは、同時代のインド亜大陸におけるイスラーム復興運動の中でもスーフィズム（イスラーム神秘主義思想）に大きな影響を受けて、自らの信仰を確立した。さらに、彼は、少年時代に家族を失い孤児となって貧困の中を生き抜いた経験から、イスラームの伝統に創造的な再解釈を行い、特にその社会経済的な福利向上の側面を重視した。バシャニにおけるイスラームは、権力の中心からは遠い周辺に置かれた被抑圧者としての経験に基づき、またイスラーム世界の中でも周辺地域としてのベンガルで育まれたという二重の意味での周辺的な特徴を帯びている。しかし、周辺から生まれたその思想は、広大な視野を持ち、普遍的な性格を備えた極めてユニークなものだった。

バシャニが生きた時代の、特定の時代の具体的な状況における彼の政治的発言だけを追ってみても、彼がその背景に持っていた哲学は見てこない。しかしながら、大きな振幅を持つようにも見える彼の政治的発言や行動には、彼のイスラーム信仰から生まれた独特の政治哲学があった。このような問題関心から、彼の生涯全体を見とおして、その思想と行動を一貫した相のもとに描き出そうとした研究に、Abid Bahar がカナダの Concordia University に提出した博士論文 “THE RELIGIOUS AND PHILOSOPHICAL BASIS OF BHASANI’S POLITICAL LEADERSHIP” (2003) がある。本稿の考察も、このBahar の分析に多くを負っているが、バシャニがその生涯の最晩年 (1974年) に発表した彼のイスラーム信仰に関するテキストについても独自の検討を行なった。

以下の論述では、まず彼の思想と行動の核心をなす哲学をラブビヤートの思想として捉え、その内容を検討する。続いて、ラブビヤートによる秩序を実現するために邁進した彼の闘い (ジハード) の足跡を振り返って見たい。

## I. ラブビヤートの思想

イスラームとは唯一神に対する絶対帰依を意味する。すなわちイスラームとは、「唯一神アッラーとその使徒であるムハンマドを信じ、聖典クルアーンの教えに従って生きること」を意味する。そのため、狭義の宗教面に限らず、社会生活全体をイスラームが律する<sup>(11)</sup>ものとされる。つまり、イスラームとは、社会・経済・政治等人間の生そして死に関する、包括的な教えであり、理想を含むものとされるのである。イスラームにおいては、まさにこれらの教えを実践することが宗教なのであり、この意味で政治と宗教は分かちがたく結びついている。

しかしながら、聖典の教えと預言者の事跡

から何を政治の世界で実現すべき理想として理解し、その実現のための手段をどのようなものとして捉えるかには、幅がある<sup>(12)</sup>。イスラームの多様な伝統の中でも、内面の道をたどって、聖典の「内的意味」を探ろうとするスーフィズムの伝統<sup>(13)</sup>を受け継いだバシャニの場合には、政治において実現すべき理想はどのようなものとして捉えられ、それはどのようにして実現されると考えられたのだろうか。彼の最晩年、1974年に発表された “Palonbad: ki o keno? (ベンガル語: 神命実践主義とは何か、何故か?)” と “Rabubiyater Bhumika (ベンガル語: ラブビヤートの役割)<sup>(14)</sup>” の中に、その答えを探ってみたい。

### ・保全者としての神—福利向上のためのイスラーム

バシャニによれば、絶対者としての神は、万物の創造者であるとともに、それらの被造物を保全し、ケアする存在でもある<sup>(15)</sup>。

バシャニは、この保全者としての神による秩序をラブビヤートと呼んだ<sup>(16)</sup>。バシャニは、この保全者としての神の特徴を重視した。

彼は、政治の中で、保全者としての神による秩序を目指すことにより、人々の福利向上を実現しようとした。そして、バシャニにとって、このラブビヤートは、特定の一宗教に限られたものではなく、普遍的かつ包括的な人間の理想を表すものだった。

### ・多様性の承認

創造主としての神は、ただ単なる戯れとして万物を創造したわけではない。天と地の間にある全てのものは、それぞれ個別の目的を持って作られている。すなわち、この世界は、それぞれ個別の目的をもった多様な創造物が住む、彩りに満ちた豊かな世界として捉えられる。被造物の世界における、多様性の積極的な承認は、バシャニの世界観の根本を成している。このような見方から、国民や民族と

いった集団とその言語・文化についてもそれぞれの個性を認識しその保全を図ろうとする姿勢が、バシャニの中に形成された。<sup>(17)</sup>世界の多様性を承認し、その積極的な意義を認めてゆく姿勢は、バシャニの長い生涯を通じて一貫していた。

### ・神への愛と人への愛

保全者としての神の側面は、また、神と人間、そして人間同士の関係にも反映される。ラブピヤートにおいて、人間は、神に対する義務とともに他の人間に対する義務を負う。一人の人間の存在する位置は、神にたいする垂直的な関係と、同胞としての人間に対する水平的な関係の交わるところに位置付けられる。そして、このような位置に置かれた人間は、神への義務を果たすために、神が他の人間との関係において実現することを望む価値・秩序を実現しなければならない。神への義務と人への義務は、決して別個のものではなく、それらは同時に実現されるべきものとして捉えられるのである。

### ・愛情に基づく秩序

では、保全者としての神の秩序であるラブピヤートは、人間と人間との間で、どのような秩序を要請するのだろうか。

バシャニは、それを権力と権威に基づく人間の秩序に対比して、愛情に基づく人間の秩序として示す。それは、バシャニによれば「父親が子どもの成育に必要なものを整えて育む」ような、父と子の間にある愛情である。<sup>(18)</sup>この愛情に基づく秩序は、もしそれが威厳と命令によって強制されたならば、かえって人と人の間に亀裂を生む。そのとき、治者と被治者は疑惑によって隔てられ、相互不信に陥るだろう。バシャニは、この愛情に基づく秩序を、他人の指示や命令によらずに自発的に情熱を持って受け入れることを求める。それが実現されたならば、国家システムは、「育

む愛情」の「甘い蜜」にどっぷりと浸かり、治者と被治者の距離は消滅するだろう。

神を愛するものは、すなわち、他人を愛するものであり、他人の置かれた状況に意を用い、その状況の改善と福利の向上に力を尽くす。バシャニによれば、政治の目的は、この愛を持って、万人の福利向上に邁進することにある。このようにして政治の目的を定義するならば、そこで第一に視線が向けられるのは、本来の平等状態とは程遠い、人間の人間による搾取と抑圧であり、その結果としての貧困である。

バシャニが思い描くイスラーム国家とは、ラブピヤートに示された、このような愛情に基づく秩序が実現された国家である。そしてイスラーム革命とは、このような国家を実現するための不断的努力である。それはこの搾取と抑圧に苛まれる世界において、ユートピアを追求し、その実現に向かって闘い続けることに他ならない。

その闘いにおける最も手ごわい敵として、バシャニが認めたのは、人間の利己心の暴走であった。バシャニは、利己心を人間における不可避の性向として認める。バシャニは、利己心と自己利益の追求を人間の自己保存に必要なものとして認め、全面的に否定することはない。ただし、それが昂じて、他人を搾取・抑圧し、紛争を生むに至る暴走を諷める。利己心が強力になる時、人は他の人間を自己利益増進のための道具とみなすに至り、人間の人間による搾取と抑圧が発生する。また、自己利益に振り回され、物欲に支配された人間は、他者と衝突することをためらわず、その衝突は、時として破滅的な結果を生む。

バシャニは、冷戦下の世界で、米ソの双方がそれぞれの「平和」を主張して対立しあう状況を、二大国が「平和」の名の下にそれぞれの自己利益を貫徹しようとする危険な状況と認識していた。

利己心が何の制御も受けず、野放図に追求

される時、人間の秩序は危機を迎える。では、人間の利己心は、いかにして制御され、愛情に基づく人間の秩序に向かうことができるのか？

### ・利己心と精神性

バシャニが、破滅的な状況を回避し、保全者としての神による秩序を実現するために、大きな期待をかけたのは、人間が本来持つ精神性（スピリチュアリティ）であった。精神性とは、「世俗の生における喜びと悲しみ、愛情、そして創造物の秘密、社会的及び家族的絆を支配する」[Maksud 2003: 681] ものであるとされる。

バシャニによれば、個人の一身において、利己心と拮抗し、平衡を回復させるもの、それが、この精神性である。バシャニは人間の内面における次のような心的力学を想定している。

人間は、その内面において、自分の信ずることと相反する事柄を否定しようとする傾向をもつ。すなわち、一心を利己心が支配しているときには精神性が否定され、人間は容易に物欲の奴隷に成り下がってしまう。従って、一身において利己心を制御・統合するためには、一心において利己心と精神性を平衡・調和させることが必要となる。

さらに、社会的レベルにおいては、利己心が暴走して、搾取が行なわれ、破壊的な闘争が行なわれないように、個々の利己心を統合・調整する必要がある。では、この社会的レベルにおける利己心の統合・調整は、具体的にどのような社会システムによって可能となるのだろうか。この点を明らかにするためには、バシャニの主張する精神性のその他の側面を、併せて慎重に考察しなければならない。

### ・多様性と精神性

バシャニにおける精神性の認識は、人間の内面における、利己心の制御・統合を可能に

するだけでなく、異なる宗教間の平等性の認識とその個性の尊重を要請するものだった。

全ての人間は、衣食住や教育・健康等の基本的ニーズにおいて平等であるだけでなく、これらの基本的ニーズが満たされた後の精神的ニーズにおいても平等である。ヒンドゥー、ムスリム、仏教徒、キリスト教徒はすべて、それぞれの宗教の儀式や経典の相違に関わらず、このような精神的発展を遂げることを目指している。そして、このような人間の精神性の発展を可能にするものがラブビヤートなのであり、その点において、ラブビヤートはイスラーム及びその他のどんな特定の宗教にも限定されない「自明の普遍的理法」[Maksud 2003: 681] であるとされる。

ラブビヤートという普遍的理法の基盤の上に、宗教を含む人間世界の多様性の花が咲く。万物の創造には全て目的があるとすれば、それらの多様な、それぞれかけがえのない個性を保全し、育むことが究極的な平和——神の愛による秩序に結びつく。バシャニにおける多様性の承認と、精神性の認識の関わりを併せて考えると、その目指す社会は、このような楽観的イメージになる。

しかしながら、それは人間を欲望と満足の関係でのみ捉え、市場における自動調節機能に、「神の手」の存在を信ずる信仰とは、大きく異なっている。バシャニの目指すユートピアに至る道は遠く、その入り口は狭い。

バシャニがその生涯を通じて求め続けたのは、一人一人の人間が一身における自己利益の追求と精神性の調和と言う狭い道を歩んで、それぞれのかけがえのない目的に目覚め、抑圧と搾取が解消された平和な世界を実現することだった。この狭く、しかし愛と喜びに至る道をそれぞれが歩み始めることが、万人の万人による万人のための福利の追求というラブビヤートによる秩序の実現へ至る第一歩なのである。<sup>(19)</sup>

政治の目的を、神の愛による秩序の実現

——万人の福利向上に定めたバシャニは、このようなビジョンの実現に向かって、現実の世界を苛む搾取・抑圧とあくなき闘いを繰り返した。

## II. ジハードの意義

### ・窮乏化の罣

バシャニが生きた時代、そしてグローバル化が進む現代においても、インド亜大陸の農村の貧困層は、飢饉、洪水、サイクロン、そして人間による搾取という様々な困難と闘っている。彼らは、様々な複合的な要因が織り成す「窮乏化の罣」〔チェンバース 1995：216〕に捉えられ窮乏化して行く。

バシャニにとって、ラブピヤートが示す、愛情に基づく秩序を実現する戦いは、何よりもこれらの具体的な困難、窮乏化の罣を構成する要因を取り除くことから始まった。

バシャニはその幼い頃の記憶で最も鮮明に残っているのが飢饉の記憶だったという。毎日学校で顔を合わせていた級友が、しばらく学校に来なくなり、久しぶりに外で出会ったその姿は骨と皮だけになっていた。バシャニ自身も、保健・衛生サービスが欠如した農村を襲ったコレラの大流行で、次々と家族を失い、孤児として流浪した体験を持つ。

バシャニは、当時のベンガルの農村が置かれた、様々な困難の中に生まれ、生き、闘って、人となった。バシャニという名前自体も、このような闘いの記憶を留めるものである。バシャニは、1920年代のアッサムで、洪水に苦しめられていたブラマプトラ河の中洲に住む人々とともに堤防を築いた。人々は、彼を、その中州（バシャン・チョール）の名をとって、バシャンのモウラナ（イスラム教の指導者）と呼ぶようになり、モオラナ・バシャニという今日に至る通称が定着した。

アマルティア・センが明らかにしたように、飢饉は自然災害が直接の原因となるのではな

く、それをきっかけとして生ずる人為的な社会・経済の変動によって生まれる〔セン 2000〕。また、洪水やサイクロンによる直接的被害も、人間の社会と自然の相互関係のあり方によって生ずるものであり、災害発生の前後に、人間の社会の側がどのような体制を整えているかによって、その被害のあり方は異なってくる〔萱野 2001〕。社会システムが、弱者を省みず、その声が反映されない体制となっている時、その被害は最弱者に集中し、災害がきっかけとなってさらに窮乏化が進む。

1920年代まで、ベンガル・アッサムの農村で個々の農村の農民たちの具体的な窮状を改善することに携わっていたバシャニは、やがて、これらの問題の解決のためには、世俗の権力をめぐる争いとしての政治の力が必要であることを悟り、政治家としての道を歩み始める。

バシャニは、植民地時代のベンガル、アッサムにおいて、ザミンダールと宗主国イギリスによる搾取と抑圧に徹底して反抗した。パキスタン時代には、ベンガル人の独自のアイデンティティーを否定し東の国民を恒久的抑圧状態に置こうとするパキスタン支配層と戦った。バシャニにおいて、ラブピヤートが示す愛情に基づく秩序を実現する闘いは、まずアッサムそして東パキスタンに生きる貧農たちの窮状を救うことに向かった。そしてさらに、その戦いは、人為的政治共同体としての国民国家の枠を超えてグローバルな地球社会のレベルで、神の秩序の実現へと向かう。

### ・イスラーム世界に向かって、世界の指導者に向かって

バシャニがその最晩年に、イスラーム世界の同胞に向けて、そして世界の指導者に向けて発したメッセージを読むと、搾取・抑圧を撤廃し、多様性が尊重された自由で平等な世界を実現しようとするバシャニの意思はグローバルなレベルにおいても貫かれているのが分

かる。

1976年11月28日、世界のムスリム同胞に対し、メッカで行うことが予定されていた演説<sup>(20)</sup>の草稿で、かれは次のように述べる。

今日、世界の資源の大半がムスリムの支配の下にあります。この経済的及び政治的条件の下で、ラブビヤート（アッラーの王国）を実現するために、次の100年間のリーダーシップは、ムスリムこそが提供しなければなりません。したがって、今日ムスリム社会は、新しい責任の意識に導かれて、人間と人間の間の不平等、分裂、超えがたい壁を打ち砕き、あらゆる種類の不正を終わらせ、世界に平和を確立するために、神のラブビヤートの目的に沿って真正の社会主義を確立しなければなりません。

中東のイスラーム諸国に神は無尽蔵の富をもたらしました。私が願うのは、富を持つ全ての兄弟が、富を持たない兄弟に支援することです。富はなくとも働く力のある者達と力を合わせてともに進むことです。[Maksud 2003: 564-565]

ラブビヤートの思想は、全人類の福利向上を目的にしている。バシャニは1975年8月「紛争に苛まれる世界の指導者たちへの要望」と題して次のような6か条の提案を行っている。

1. 世界のすべての人々は、一つの同じ、広大な歴史の中に包摂されていることを認識すること。
2. 史上かつてない、知識と科学、そしてテクノロジーの発達が進む今日、世界の人々は、他の国の人々を、国境を越えて兄弟として抱擁することを認めること。
3. 社会・経済的な要素だけが、社会や国家を動かす力なのではなく、道徳や文化的要素が社会や国家を動かす力になっているこ

とを認めること。

4. 一国の中で、誰かが他人を搾取してはならないのと同様に、ある国が他の国を抑圧したり、搾取したり、力によって破滅させてはならない。
5. 人はそれぞれの能力に応じて働き、それぞれの必要に応じて得ることを認める。
6. 先進地域の知識・科学、そして技術を社会の発展に生かすため、真正の援助を受けるための権利が後進地域にあることを認めること。[Maksud 2003: 563]

その最晩年においても、バシャニは、ラブビヤートの理想を地球社会で実現し、人類を兄弟愛で結んで、世界に平和をもたらすことを求めて戦い続けていた。

## むすびにかえて—ラブビヤートと政治

小論の結論として最後に、モオラナ・バシャニのラブビヤートと政治の関わりの特長について、いくつかの角度から検討を加えて、バングラデシュ政治の文脈における、その歴史的な意義を振り返ってみたい。

ラブビヤートは超越的な存在である神に根拠を持つ秩序である。これに対し、政治とは神ならぬ身の人間が、限られた資源に依存して、限られた知的・精神的能力を駆使して、多様な人間の間に共生のための秩序を作り上げる人間の活動である。そして、いかなる神による秩序も、人間の世界に実現されるためには、それが人間によって認識され解釈され共有されなければならない。

### ・ラディカル（根源的）なイスラーム

イスラームの伝統的な政治観によれば、神による秩序はコラーンをはじめとする法源に示されたイスラーム法（シャリーア）に示されたものであり、それを確定する法学者による統治こそが神による秩序を実現するものと

される。このような政治観は、イスラーム法という外面的規範の樹立とその運用を政治として捉える、いうなれば律法主義的政治観と呼ぶことが出来よう。

これに対して、バシャニのラブピヤートにおいては、神の保全者としての特徴が重視され、人間の福利向上を図ることこそが保全者としての神の秩序を実現することであり、政治の目的であるとされる。律法主義的な政治観と比較すると、バシャニは、外面的規範の樹立とその運用を超える律法の目的を問い、そこに政治の意義を求めた。つまり、バシャニは、聖典と預言者の生涯の内的意味を根源から問い直し、そこに人間にとっての政治の意味を独自に読み取ろうとしたのである<sup>(21)</sup>。

Samaddar の指摘するとおり、まさにバシャニは「イスラームを政治化するのではなく、イスラームに政治の意味を読み取<sup>(22)</sup>」り、それを実践したと言えよう。

聖典と預言者の事跡の内的意味にイスラームの本質を探究し、そこに政治の意義を見出したバシャニにとっては、ムスリムが墨守する様々な儀式や信仰箇条は、人間の福利向上という究極的な目的から見れば、副次的な意味しか持たず、ラブピヤートを実現する聖なる戦い（ジハード）においては、手段として利用可能なものだった。

1930年代、世界的大不況の後で、窮乏化を深めた貧農たちが借金の利息の制限を求めて開いた農民大会を、バシャニはイード（イスラーム教の祝祭）の集会の名の下に開催し、官憲による弾圧を逃れた。イードの集会でありながら、そこにはムスリム以外の農民も多数参加して、それぞれの禁忌に触れない食事が振舞われた。

このエピソードは、今日のバングラデシュにおいて、イスラームが政治的に利用され、選挙前には政治家によってイスラームへの外面的な忠誠競争が繰り広げられ、他宗教への排斥の圧力が強まる様子とは大きく異なる。

## ・イスラーム国家と道徳・愛情

バシャニが思い描くイスラーム国家とは、保全者としての神の属性が愛情に基づく秩序として実現された国家である。そして、イスラーム革命とは、このような国家を実現するための普段の努力（ジハード）を続けることに他ならない。

このようなバシャニのイスラーム国家像は、同時代のパキスタンにおいて、厳格なイスラーム法の実現を目指したイスラーム政党ジャマテ・イスラミのようなイスラーム国家像とは、極めて対照的である。

これらのイスラーム政党の標榜するイスラーム国家が、イスラーム法という外面における形式をもって、その実現が図られるものとすれば、バシャニの構想するイスラーム国家とは、その社会における人間関係の質やそれを支えるモラルを問題にしている。

そして、バシャニが、このような道徳的資質を第一に求めたのは、権力の座にある治者たちであった。木村雅昭が「マシーンなきマシーン流政治」と評したインド現代政治の特徴－官民総ぐるみで繰り広げられる、多分に腐敗した利益誘導型の政治－は、分離独立前のアッサムで、そしてパキスタン、バングラデシュでバシャニが目撃し、批判し続けたものでもあった。バシャニは権力を握る政治家の道徳的性質が改善しない限り、政治が改善されることはないとする。アッサムで、そしてパキスタンで、道義の感覚を疑わせる政治家たちに対するとき、バシャニの批判は苛烈を極めた。

しかし、政治に道徳からは独立した法則と価値を認める近代的な政治観を身に着けた政治家から見れば、政治家に愛情と道徳を求めるバシャニは、時代錯誤の典型と映るだろう。Bahar が紹介しているムスリム連盟総裁としてのジンナーとバシャニの会見のエピソードはまさにそれを示している。

Bahar は、ジンナーの側近だった M. A.

イスパニーの回想として、1946年のシレットにおけるジンナーとバシャニの会見を伝えている。[Bahar 2003: 118-119] 当時、アッサム州ムスリム連盟の総裁だったバシャニは、アッサムでムスリム移住民が置かれた窮状を涙ながらに訴えた。会見の後、ジンナーは側近に対してバシャニは政治指導者として不適格だとし、次のように語った。

感傷というナンセンスや、感情が政治に占める場所はない。政治とはチェスのようなもので、悪は涙によっては正されない。悪は勤勉と勇気、そして固い決意によってのみ正されるのだ。感情の流露は容易だが、それを止めるのは困難であり、感情によって最初に被害を受けるのは、国家を巡る政治である。

彼は、優れた説教者として聴衆の涙を誘うことは出来るだろう。しかし優れた指導者ではない、特に冷静な頭脳と乾いた目で状況を見極め、決断しなければならない危機の時においては…。

政治を道徳や愛情に解消することはできない、しかしながら道徳や愛情を無視した政治はまた自己破滅的なものとならざるを得ないだろう。

バシャニの場合は、道徳を身に付けるべき主体とされたのは、治者としての政治家であった。そして、その愛情が向けられるべき方向は、最も権力からは遠く、その利益誘導の対象ともされない貧農たちであった。

ジンナーが「国父」として建国したパキスタンの東翼において、人々の感情は、言語の問題、そして西の東に対する政治・経済的支配の問題をめぐる噴出し続けた。これらの感情をパキスタン指導層は、どれだけ真剣な政治の問題として把握できていたのだろうか。

## ・政治家バシャニ

搾取と抑圧に満ちた世界における闘いで、政治家としてのバシャニが重視したのは大衆闘争であった。これらの闘争において、バシャニが大衆を動員するのに発揮した力の大きさは、バシャニを批判する側も認めるところである。

時には「雷鳴のような」大音声で、効果的な身振りを伴って劇的に展開するバシャニの演説は、聴衆を魅了し、その心に触れ時には「火をつける」効果を持った。

政治家としてのバシャニを省みる時、その大きな特徴となっているのは、その弁舌の力だけではない。バシャニの外見自体が、同時代のインド亜大陸の政治家の中でも異彩を放っている。彼は、一生を通じて、どんな場においても、その白く長いパンジャビ（上着）とルンギ（腰巻）、そして簡素な帽子を常に身につけ、その姿はベンガルの農民の姿をそのまま代表していた。これは、彼が政治に発心した青年時代に先輩政治家から受けた「自分が政治家として働こうとしている人々の服装を尊重できないで、どうしてその人々を尊重できるのか」というアドバイスによるものだったが、ベンガル・アッサムの政治社会の中でも、それまで彼らを代表する者がいなかった貧しい農民たちが、バシャニと自己を同一化することを容易にした。バシャニは、その言葉と行動で、ベンガルの農民が自己組織化し、政治の場において活動することを助けた。

また、彼は、政治家でありピール（聖者）だった。スーフィズムの伝統が根強いベンガルの農村では、宗教指導者たちをピール（聖者）として敬い、その神秘的な力によって、現世利益を期待する風土がある。この点においても、彼はベンガルの大衆に対して大きな影響力を持っていた。インドにおけるガンディー的な政治のあり方を、「聖者の政治（saintly politics）」として、そこに「不正や抑圧が存在し続ける限り、それらに対してさらなる自

己犠牲で立ち向かう…社会変革的なエートス」に駆り立てられて行動する人々とそれに対する熱狂的な支援があるとするならば、バシャニもまたアッサムとベンガルの虐げられた人々にとっての聖者だった。

#### ・神の主権と所有

バシャニのラブピヤートの思想には、神の主権と、神による万物の所有という根本がある。これは、バシャニ自身がその生涯を通じて貫いた根本でもあった。バシャニは、自分と家族の為に蓄財をすることはなく、国家的な政治家となっても、きわめてつましい生活を送った。今日のバングラデシュにおいても、政治家としてのバシャニのこのような清廉さと一貫性に対する評価は高い。

神の主権と万物の所有を認め、私的所有を否認する原則は、共産主義と高い親和性を持つ。実際に、バシャニが人民アワミ党の総裁として主張した土地や生産手段の国有化という政策は、共産主義者と重なるものであり、共産党を初めとする左翼は、バシャニの国民的な人気の傘の下で政治活動を展開していた時代があった。バシャニと左翼の二人同行はしばらく続いた。

しかしながら、国家所有を原則として、「科学」に基づく、配分と計画を進めようとする共産主義と、根本における神の所有と「愛情」に基づくラブピヤートの秩序を実現しようとするバシャニの間には、越えがたい溝が存在していた。「宗教はアヘン」とする共産主義に対して、バシャニのラブピヤートは、すべてを包括する普遍的真理なのである。

ラブピヤートの思想をその根本に持つバシャニの現実政治に対する発言と姿勢は、それぞれの具体的状況に応じて展開される。ある状況においては、このような根本的な相違があっても共闘は可能でも、別の状況においてはこのような根本的な相違が政治戦略上の不協和を産む。ダッカ大学学生時代に政治活動を始

め、左翼の一員としてバシャニを敬愛して、行動を共にし、草の根の農民から学んでいたラシド・カーン・メノンが、後にバシャニと袂を分かつに至ったのも、このような根本的な立場の相違が自覚された結果だったのかもしれない。

#### ・精神性の認識と人間の自由

バシャニ自身は、1974年に、共産主義との根本的な立場の相違を認めて共産主義に対する批判を公にした。それによれば、ラブピヤートの思想と共産主義を隔てる大きな相違は、人間の精神性の認識にある。ラブピヤートの思想における、このような人間の精神性（スピリチュアリティ）の認識こそ、一方では、宗教の別なく、すべての人間の平等性と友愛を彼に確信させ、他方では、左翼の唯物論者と彼を隔てたものだった。

共産主義は、このような人間の精神的な必要を認識できないので、人間の全体的な必要を満たすことはできないとバシャニは、批判する。バシャニは、1974年の時点で、「いわゆる社会主義世界の支配と統制は、人間に耐え難い苦しみを与えた。そこでは、人間の精神的自由の道は与えられていない。」と述べていた。ただし、ここで注意しておくべきなのは、バシャニは人間自身の精神の自由の視点から共産主義を批判しても、共産主義を奉ずる人間の精神の自由を尊重したことである。前述のラシド・カーン・メノンの述懐によれば、政治的立場の相違が明らかになった後に、バシャニは孫と同じ年代の違いがあるメノンが新しい道を歩むことを奨め、その前途を祝福した。

#### 政治と宗教一再び

以上のような、バシャニの思想と行動の根源にあるラブピヤートの哲学の検討から、南アジアの文脈における政治と宗教の問題をもう一度考えてみよう。

モウラナ・バシャニが生きた20世紀前半のインド亜大陸は、植民地支配の中で形成された、ヒンドゥー、ムスリム両コミュニティの確執が、凄惨な暴力を伴って暴発した地域であった。その中で政治家として活動したバシャニが、人間の精神性における平等を根拠に、多様性の承認の態度をその思想の中核に持っていたことは、強調する価値がある。

これは、宗教と政治をめぐる問題について、宗教を私的領域に押し込めることによって解決しようとする世俗的アプローチとは異なる。バシャニのラブピヤートには、宗教自体の内奥から発し、異なる宗教間の平和的共存を可能にする思想の契機が含まれている。バシャニのラブピヤートにおける精神性の重視は、異なる文明間に橋を架け、その外壁を融解させる可能性を秘めている。モウラナ・バシャニはその生涯を通じて、イスラームの外延を広げ、ヒューマンイズムの豊かさをその内に取り込んだ。

今日のグローバル化する世界の中では、一国の政治も地球大のレベルでの政治・経済と連動しており、国家はそれを超えるグローバルなシステムの中での生存を迫られている。インド・パキスタン・バングラデシュを含むインド亜大陸もその例外とはなりえない。グローバルなシステムにおいて市場という一つのモデルが強大な力を得て世界を席卷するとき、これらの国々の政治・経済も大きく影響を受ける。

このような状況の中で、この地域における政治の一つの典型として存在する利益誘導型の政治は、政治の大衆化とともにさらに強化され、露骨な掠奪型の政治に転化しうる危険がある。1990年に長い軍政を終えて1991年からは民主的な政権交代が行われているバングラデシュにおいても、2大政党間の競争は、ヴィジョンや政策をめぐるものというより、2つの陣営に離合集散する個別利益同士の分捕り合戦の様相を深め、社会内部に深い亀裂

と分裂を生み、政治暴力の治まる気配はない。

このような時代にあって、モウラナ・バシャニが提示したラブピヤートの思想は、宗教の立場から、あらためて政治の根本的意義を問い直すユニークな視点を提示している。バシャニは、現実世界から学びつつ自己の経験と聖典の意味を問う往復運動の中で、聖典の内奥に潜む意味を問い直し、政治の目的を見出した。それは、個々の人間の精神性に信頼をおき、政治の営みの中にある道徳や愛情の価値を照らし出すものだった。

バシャニの死後、このような政治へのアプローチは消滅したかに見えるが、その遺産は、今も細い水脈となって広い地下に伏流し、やがて合流して地上に現れる時を待っている。

それは、かつてのバシャニのような聖人によって率いられた運動のような激しさには欠けるかもしれない。社会主義の理論体系に裏打ちされた壮大さにも欠けるだろう。また、それはイスラーム法の権威を傘にフォトワ(判決)を振りかざす権威主義とも無縁だろう。激しさや壮大さや権威とは無縁だが、一人一人が世界から学び、自らの経験を先人の経験と照らし合わせて羅針盤を作り、安楽に流れる弱さを断ち切って、良心に従って進むとき、バシャニのラブピヤートは蘇る。

#### 謝辞：

本稿は、平成14・15年度科学研究費基盤研究 A「地球市民社会の政治学」(中村研一研究代表)の研究成果の一部である。またバングラデシュにおけるバシャニに関する資料の検討と分析においては、Asiatic Society of Bangladesh の Sirajul Islam 教授、バシャニの伝記作家であるジャーナリストの Syed Abul Maksud 氏の協力を得た。他にもここには記さないが、平成16・17年度の国外研修中、バングラデシュ、インドおよび日本で多くの方々の協力を得たことを、ここに記して深く感謝したい。

[注]

- (1) 明治44年10月31日 日記（田中正造全集 第12巻 p.549）
  - (2) 『田中正造の生涯』 p.223
  - (3) 谷中村における田中正造の戦いと、その内面的・思想的意義を根源から提示したものとして、上記の林竹二〔1976〕がある。
  - (4) 同上 p.229。
  - (5) イスラームの知識人の呼称であるモオラナ（モウラナ）の表記については、ベンガル語の発音に近いモオラナを採った。
  - (6) ヒンドゥー・ナショナリズムについては、中島〔2002〕が詳しい。イスラーム法による統治を求める運動は、バングラデシュにおいて独立後もジャマーテ・イスラミ等のイスラーム政党によって主張されてきたが、近年は裁判所や主な政府機関を爆破する等の過激な活動に走る集団（JMB: Jama'atul Mujahideen Bangladesh および JMJB: JAGRATA Muslim Janata Bangladesh）が現われ、2005年8月17日にはバングラデシュ全土60箇所ですべて同時爆破テロを実行した。その犯行声明において、彼らは神の聖戦士を名乗り、イスラームによる統治の樹立を求め、民主主義を敵としている。その後の政府の摘発によって、多くの容疑者が逮捕され、類似の事件は起こっていないが、過激な原理主義勢力のネットワークがバングラデシュ国内に広範囲に広がっていることを示唆する事件だった。
  - (7) これまでは、大反乱以降の政策レベルでの両者の関連—少数派としてのイスラームの利益擁護の動きを利用したイギリスの分割統治政策、が目撃されてきたが、メトカーフ〔2006〕は、それ以前のイギリスによる統治政策の中に、既にインド社会をヒンドゥーとイスラームの二つのコミュニティに隔てる契機があったことを指摘している。具体的には、第1に18世紀の末にヘースティンクスによって行われた法体系の整備において、現実には様々な宗派や伝統・習慣が混在するインドの地域社会が画一的にヒンドゥーとイスラームに大別されるようになったこと（同上 p.89）。そして第2に、ラームモハーン・ローイをはじめとするヒンドゥー改革派の歴史認識において、インドの歴史を偉大な過去からの衰退として捉え、その衰退の原因をイスラーム支配者の専制政治とするイギリスの東洋史観が受け入れられたこと（同上 p.127）を挙げている。
- これらの指摘に従えば、植民地インドにお

けるヒンドゥーとイスラームの間でのアイデンティティの分断的形成は、すでに18世紀の末から、イギリスによる植民地支配を通じて形成された社会認識や歴史認識に始まっていることになる。

植民地支配という権力の作用が、どのような経路を通して被支配者の社会に亀裂を生じさせたのかを考える上で、これらの指摘はきわめて重要である。

- (8) より詳細な政治的履歴については、〔萱野 2000: 82-90〕参照。
- (9) バシャニが生きた同時代においても、彼に対する毀誉褒貶は、その振幅の激しさと与えられたレッテルの多様さに、驚くべきものがある。バシャニは、「原理主義者」と言う非難を浴びせられる一方で、イスラーム教国家パキスタンに反抗する「インドの手先」と呼ばれた。また、宗教コミュニティ間の対立をおおった「コミュニナリスト」というレッテルが貼られるかと思えば、イスラーム・ヒンドゥーの溝を越えて共通の政治目的の実現のために献身した世俗性が評価される。また、左翼との政治的同盟関係から「コミュニスト」と呼ばれる一方では、「彼はマルクスを読んだことはなかった」と言われる。これらの多様な評価は、彼の思想と行動を単純なカテゴリーに分類することの無意味さを示しているとともに、その思想の多様な側面が、それぞれの時代にバシャニと関わった人々それぞれによって異なる立場から評価されていることを示している。

彼の死亡記事において、ある新聞が「彼は最も誤解され、非難された人物だった」と書いたように、彼の実像はその生前には正確に理解されることがなかった。その死後も、彼をめぐる評価は、それぞれの評者の政治的立場によって大きく左右されてきた。

彼の生涯全体を振り返り、それぞれの個別具体的な状況における発言・行動の中から、バシャニの思想の特徴を探る試みは、ごく最近になってようやく本格的に取り組まれ始めている。

- (10) これまでバシャニに関して、その思想と行動全体とをテーマとして扱った研究は極めて限られている。ベンガル語でも、まとまった著作としては、Hasan Abdul Quayyum が編集した、彼の支持者や、関係者によるアンソロジー “Majlum Jononeta Maulana Bhasani (被抑圧者のリーダー、モウラナ・バシャニ：

- ベンガル語, 1988初版2004再版)”の他には、ジャーナリストのSyed Abul Maksudによる伝記“Maulana Abdul Hamid Khan Bhasani (ベンガル語, 1994初版2003再版)”や、Sirajuddin Ahmedによる同名の伝記(ベンガル語, 2003初版)があるのみである。
- (11) 『岩波イスラーム辞典』p.128
- (12) 池内恵は、イスラーム政治思想を、既存の政治社会秩序に対して革命的な作用を持たない「イデオロギー型」と、逆に「存在の構造を破壊するような方向」に向かう「ユートピア型」に分類して、近現代のそれぞれの例を分析している。[池内 2004: 116-136] この分類に従えば、バシャニの政治思想は、「ユートピア」型の一形態と言えるのかも知れない。だが、バシャニがスーフィズムの影響を深く受け、聖典と預言者の事跡の内的な意味を独自に解釈していたことを考えると、この分類では、バシャニの特徴を捉えきることには困難を感じる。
- (13) ここにおける、スーフィズムの理解は、[井筒俊彦 1981: 161-214] による。
- (14) これら2つのテキストの分析に当たっては、[Maksud 2003: 667-671, 678-681] に収録されたものを用いた。
- (15) 万物の創造者として唯一の絶対者の存在を確信し、その神の啓示を受けた最後の預言者としてのムハンマドを認めるイスラームの伝統においては、神は創造者であるとともに他にも様々な側面を持つものとされる。その中に、被造物をケアし保全する、保全者としての側面を強調する捉え方がある。
- (16) バシャニのラブピヤートは、同時代のイスラーム思想家アブル・カラム・アザード(1888-1958)と親和性を持つものである。アザードは、シャー・ワリーウッラーなどの改革派の影響を受けたウラマー＝スーフィーの流れを受ける家系に生まれ、1912年ウルドゥー語週刊誌『アル・ヒラール』を創刊して、急進的な主張を展開し理論家としてヒラーファト運動を主導した。以後は国民会議派において代表的ムスリム指導者として活躍し、独立後のインドにおいて文相も務めた。Bahar は、その研究の中で、バシャニがラブピヤートに目覚めたと自ら認める時期とアザードがラブピヤートの主張を展開した主著“Tarjuman Al-Quran”の出版時期が1921年で一致し、また両者とも、アラビア語の Rububiyah を Rabubiat と記載している点から、その影響関係を指摘する一方で、アザードがラブピヤートの理念をインド・ナショナリズムの擁護に生かしていった一方で、バシャニはラブピヤートの理念を、抑圧と搾取に対する抵抗の理念としていった相違点に注目している。[Bahar 2003: 78]
- (17) バシャニは、イスラームの指導者だったが、ヒンドゥー、仏教、その他の宗教を信ずる人々も兄弟とみなし、それぞれの信仰を尊重した。彼は、政治活動において、共產主義者・無神論者とも共闘を組んだが、彼らがイスラームの信仰簡条を守らないことを非難することは無く、また他の宗教を信ずる人にイスラームへの改宗を奨めることも無かった。
- また、バシャニは、パキスタン時代にベンガル語とベンガル文化の擁護の動きが高まったとき、支配層とイスラーム政党が「イスラームの危機」だと喧伝したのに対し、ベンガル人の文化的アイデンティティを擁護した。
- (18) ここで、バシャニが言う「父と子の間にある愛情」とは、一般的に言われるバターナリズムとは異なる。バシャニ自身は8歳の時に父を失い、10歳の時に母と兄弟を含む家族全員をコレラの流行の中で失っている。敬虔なイスラーム教徒で、メッカ巡礼も果たしていた父の保護は、バシャニの少年時代に断ち切られ、彼は孤児として貧困の中を生きた。このようなバシャニの個人史から考えると、ここで言う、父が、子供の成長のために整えるものとは、まず、最低限の子供の生存を保障するものであり、さらに、子ども自身が一個の被創造物としての独自の目的を自ら追求することを可能にするための援助を意味していたのではないか。
- (19) バシャニによれば、このような一身における利己心と精神性の平衡が生まれ、個々の利己心が社会的に統合された秩序は、歴史上極めて短い期間、預言者が生きていた頃のメディナにおいて実現されていたものだという。そして、この愛情に基づく秩序に墓碑銘を打ったのは、人間の利己心であった。バシャニは、それ以降のイスラーム世界における政治的分裂の原因を人間の利己心の増大に求める。
- (20) バシャニはメッカへの出発前、11月16日に息を引き取った。
- (21) バシャニにおいて、聖典と預言者の生涯に対するこれほど主体的な探求が可能になったのはなぜなのか? この問いに対する答えは、容易に得られない。しかしながら、同時代に生

きたインド亜大陸の他の政治家やイスラム指導者の出自と比較するとき、バシヤニがその生涯において直面した困難と、それに対する苦闘が、聖典と預言者の事跡を探究し、その意味を読み取ろうとする強い動因となったことは間違いないだろう。言い換えると、バシヤニは、経験と思索の絶えざる往復運動を、聖典と預言者の事跡と言う回路を通じて行っていたと言えるのではないだろうか。

②② Sammadder [2002: 64]

②③ 木村 [1996: 172-173]

②④ ラシド・カーン・メノンは、ダッカ大学学生時代に学生運動のリーダーとしてパキスタンの抑圧に対する抗議運動を展開した。1969年の大衆蜂起の後、バシヤニと行動を共にして、草の根の農民運動に関わった。バングラデシュ共産党から後に労働者党 (Workers Party) を設立し、現在も党首としてバングラデシュの政界で左翼11政党連合の中心的人物として活躍している。筆者は1999年3月にインタビューの機会を得た。

②⑤ *Holiday*, November 23, 1976

#### [参考文献]

(邦文)

池内 恵, 2004, 「イスラーム的宗教政治の構造」,

池上他編『岩波講座宗教8 暴力』: 107-140,  
岩波書店

井筒俊彦, 1983, 『イスラーム文化』, 岩波書店

大塚他編, 2001, 『岩波イスラーム辞典』, 岩波書店

加賀屋寛・浜口恒夫, 1977, 『南アジア現代史Ⅱ』  
山川出版社

萱野智篤, 2000, 「モウラナ・バシヤニ覚え書き」,  
『北星論集』第37号: 77-98, 北星学園大学経済学部

同, 2001, 「水屋とサイクロンシュルター」『北星  
論集』第39号: 39-52, 北星学園大学経済学部

木村雅昭, 1996, 『インド現代政治』世界思想社

小杉 泰, 2002, 「イスラーム研究と南アジア」長  
崎暢子編『現代南アジア①地域研究への招待』  
: 189-212, 東京大学出版会

チェンバース, ロバート, 1995, 『第三世界の農村  
開発』明石書店

中島岳志, 2002, 『ヒンドゥー・ナショナリズム』  
中公新書ラクレ

中村研一, 1996, 「世界政治と市民」, 『平和研究』  
第20号: 6-21, 日本平和学会

林竹二, 1976, 『田中正造の生涯』(講談社現代新

書442, 講談社

メトカーフ, バーバラ・D, トーマス・R, 2006  
『インドの歴史 (ケンブリッジ版世界各国史)』  
創土社

(英語, ベンガル語)

Ahmed, Sirajuddin, 2003, *Maulana Abdul  
Hamid Khan Bhasani*, Dhaka, Baskhar  
Prokashoni

Bahar, Abid, 2003, *The Religious and Philo-  
sophical Basis of Bhasani's Political Leader-  
ship*, Montreal Canada, Concordia Univer-  
sity

Maksud, Syed Abul, 2003, *Maulana Abdul  
Hamid Khan Bhasani*, Dhaka, Hakkani  
Publishers

Samaddar, Ranabir, 2002, *Paradoxes of The Na-  
tionalist Time*, Dhaka, University Press  
Limited

[Abstract]

## Maulana Bhasani's *Rabubiyat*: Study of Bangladesh Politics (2)

Tomoatsu KAYANO

Maulana Abdul Hamid Khan Bhasani (1885-1976) was an outstanding politician as well as an Islamic teacher who played a crucial role in the struggle for the independence of Pakistan in 1947 and Bangladesh in 1971. *Rabubiyat*, literally meaning "the rule of god", was the philosophical basis of his political thought. Having its roots in the Sufi reformation movement in 19<sup>th</sup> century Islam, *Rabubiyat* gives importance to the character of god as the preserver of creatures. Maulana Bhasani found the meaning of politics as the advancement of people's welfare learning from this idea and his own struggles in life as the son of a poor peasant. *Rabubiyat* was a cardinal source of inspiration in his struggles against the oppression by British colonial rule and the Pakistan government. Analyzing different aspects of his political thought founded on *Rabubiyat*, the author holds the view that Bhasani established a liberal political view emphasizing the spirituality of each individual. Bhasani appears as a politician who tried to defend the basic needs, physical as well as spiritual, of the oppressed. Unlike the general misunderstanding that Bhasani was a fundamentalist or left leaning politician, this paper takes a new look at Maulana Bhasani for further research on Bangladesh politics.

---

Key Words: Bangladesh, Islam, *Rabubiyat*